

関口和一

Sekiguchi Waichi

パソコン革命の 旗手たち



日本経済新聞社

ば、収益は自然と後からついてくるということを学んだ。

会計市場の国際化をにらんだ三木は九〇年代半ば、米国の有力財務会計ソフト会社、インテュイットにミルキーウェイを売却、その日本法人に会社を衣替えした。三木自身はその後、独立して新しいベンチャー企業の「ユニシंक」を設立するが、ミルキーウェイが誕生した八〇年にはほかにも有力な財務会計ソフト会社が誕生した。会計士の和田成史が興したオービックビジネスコンサルティング（OBC）は「勘定奉行」でヒットを放ち、やはり会計士だった川島正夫が設立したピー・シー・エー（PCA）も人気業務ソフトの「PCAシリーズ」を販売する。ミルキーウェイは今でこそその名を消したが、この三社はしばらく「会計ソフト御三家」と呼ばれ、日本におけるパソコンの業務用ソフト市場をリードする存在となった。

電子の紙「パピルス」

基本ソフトの「ウインドウズ」が登場する前のアプリケーションソフトは規格が統一されていない分、各ソフトメーカーが独自に工夫を凝らす余地があった。特に八〇年代は日本語の壁が大きく立ち上がり、だかっけていたため海外からの輸入ソフトは少なく、国内メーカーによるユニークな製品が互いに特徴を競い合っていた。その中でもソード電算機システムの「PIPS」と並びビジネス用の統合型ソフトとして人気を呼んだのが「パピルス」だった。開発したのは「ヴァル研究所」と呼ばれるソフト

ハウスの老舗で、最近では路線・運賃早わかりソフトの「駅すばあと」を主力に開発している。

ヴァル研究所は、「Very Advanced Language」と呼ばれ、利用者が自分で簡単にプログラムを組めるようにしたユーザー指向言語を研究する会社として七六年七月、東京・高円寺に設立された。「ヴァル」というのはその頭文字の「VAL」からつけた。会社設立の中心メンバーとなった初代社長の高島村隆雄や開発を担当した岡村隆らは、もともと音響機器メーカーのバイオニアで電算室を管理していた技術者たちである。米国のコモドル社の「PET-2001」が登場したのを見て、バイオニアでもパソコンの研究を開始した。その際に自分たちが開発した言語をもとに、新たな商品を作ろうと設立したのがヴァル研究所だった。

七八年にソードが開発した「PIPS」は今日の表計算ソフトのような簡易言語で、利用者が簡単に計算式を埋め込んで様々な集計に使うことができた。グラフも描けるということで米国で人気を呼んだ表計算ソフトの「スーパーカルク」もあつたが、いずれも専用の命令を覚える必要があつた。そこで島村らはコマンドレス、マニユアルレス、それにスタディレスといった「三つのレス」を標榜し、だれもが簡単に扱えるようなソフト作りを目指そうとした。

たまたま沖電気工業が8ビットパソコンの「iif-800」を開発することになり、島村たちの研究活動のことを聞いて、「何か簡単に扱えるソフトを作ってもらえないだろうか」と相談してきた。「iif-800」は画面やプリンター、それに磁気ディスク・ドライブを一体化した当時としては画期的なパソコンで、入力装置にはマウスを採用していた。島村や岡村はこの機械に目で見て直感的に操作できる対話型のソフトを作ろうと思ひ、ファンクションキーやマウスを生かすように作つたのが

「パピルス」である。製品は「PC-9801」が発売される三カ月前の八二年七月、沖電気のパソコン「ifier800/20」と一緒に登場した。

島村や岡村が製品に「パピルス」というユニークな名前をつけたのは、「パソコンがいずれは電子の紙になるだろう」という信念を持っていたからだった。パッケージにもエジプトをイメージしたデザインを使い、その後、16ビット用に発売した製品にはひらがなの「びびるす」をあてた。「ifier800」は一体型のパソコンとして人気を呼んだコモドル社の「PET」や、マウスを入力装置に使ったアップルの「Lisa」に強い影響を受けており、そうしたハードウェアの進展がまた、「直感的にパソコンを操作したい」という島村たちの願望にもうまく合致した。パピルスは他のパソコンにも移植され、累計で四万件のユーザーを獲得、当時の業務用ソフトとしてはベストセラーの一つに数えられた。さらに機能を大幅に強化したのが後継の「ファラオ（王様）」である。

島村はこれがかきつかけとなって古代エジプト文明の虜となり、エジプトに関する文献の収集にも乗り出すようになった。島村が他界した後に社長に就任した山田靖二の部屋には、今も日本で出版されたエジプト関係の本の九五%がライブラリーとして保存されている。

ソフトバンクの大恩人

日本でパソコンソフト産業が大きく成長したのは、製品を開発した各メーカーの努力もあったが、

もう一つ見逃せないのが「ソフト流通革命」を掲げて福岡から上京してきた孫正義の功績だった。

孫は八一年九月、東京・千代田区の四番町に「日本ソフトバンク」を設立、ゲームソフトなどの流通に乗り出した。流通業ならば設備投資もいらないし、商品に浮き沈みもない。特にパソコンのソフトについてはまだはつきりとした流通ルートができておらず、「資金のない自分でも始められる」と考えたのである。

ところが、日本ソフトバンクの旗揚げまではよかったものの、なかなか商品となるソフトが集まらなかった。そこで一気に取引先を集めようと、大阪で開かれる電子機器の見本市に八百万円の大金を投じ、ソニーや松下電器産業などを上回る一大展示場を確保することにした。そして孫は自分であちこちのソフトメーカーに電話をかけ、「出展費用は当社で持つので、一緒に出展しませんか」と持ちかけた。

日本ソフトバンクの資本金は一千万円。にもかかわらず八百万円もの大金を展示会に使ってしまうというのは、ほとんど賭けに近かった。しかし折からのパソコンブームで会場は大人気を呼んだ。孫は「しめた！」と思った。「参加したソフト会社はこれを機に自分たちと取引してくれるに違いない。孫はそう期待した。ところが見本市が終わっても各メーカーからは一向に連絡がない。実は各社とも出展の際、ブリスを訪れた客と直接、名刺交換をしており、孫のところを通さずに取引を始めってしまったからだった。

「このままでは行き詰まってしまう」。孫にしてみれば、この読み違いは会社を設立してから最初で最大のピンチだった。ところが拾う神もあった。力の入った孫の展示を見て、「一緒に組んでもい